

自然界の旬



15竹パウダー論争始末記

竹パウダーリンゴに軍配 今後実証実験を続ける



十二月の声を聞くと、たわわに実ったリンゴが観られるはずですが、なぜか今年の庄



ノンパウダーリンゴ(上) 竹パウダーリンゴ(中) リンゴの切り身右がパウダーリンゴ左がノンパウダーリンゴ(下)

原リンゴ園は不作です。とは言っても「環境と健康」五百四十七号で宣言した、竹パウダー効果審査会を没にするわけにはいきません。
約東の十一月十四日(土)午前十時、広島環境教育研究会と高原の家子ども塾の面々が勇躍リンゴ園に集合しました。竹パウダーをやったリンゴの木七本と竹パウダーをやっていないリンゴの木七本から、それぞれにリンゴを摘んで、別々のコンテナに収穫しました。今年は実も小さい、数量も少ないので、どちらのコンテナにも半分弱しか採れませんでした。
高原の家を持ち帰り、食堂で切った皮をむいて、パウダーリンゴとノンパウダーリンゴを別々の皿に盛ってもらいました。みんなが集合したところで、二つの皿のリンゴをそれぞれ食べてもらい、美味しいと思うほうの皿の前に殻付きピーナツを一つ置いてもらうことにしました。みんながピーナツを置いた後で種明かししてもらいました。
十八対二で竹パウダーリンゴに軍配が上がりました。市川「バンザイ」西村「グシユン」でありました。悔しまぎれに竹パウダー論争の顛末を総合的に解説しますと、今年はずっと不作で、どちらのリンゴも例年の大きさに育ち

NPO法人七塚原自然体験活動研究センター
理事長 西村清巳

意外な野外のガイダンス

～田んぼの生きもの編～
① タイコウチ

駄菓子屋で買った安物の網を振り回し、野山を駆け回り回っていた幼少の頃、つたない網さばきでも十分に捕獲でき、昆虫少年たちを楽しませてくれたタイコウチ。広島のある地域では「牛」と呼ばれて親しまれているなど身近な存在でした。因みに、牛に対して同じ水生昆虫のミスカマキリを「馬」と呼んで対比させていたようです。姿が似ていることから、大きくなったらタガメになると思っている人もいますが、まったく別の種類です。今の時期は、田んぼ周辺の湿った水路などで、静かに春が来るのを待っています。



タイコウチ

さてこのタイコウチ、漢字で「太鼓打」と書きます。鎌状の鋭い前脚がまるで太鼓を打っているように見える姿からその名が付けました。尻に長い管状の呼吸器官を備え、それを水面に突き出して何か

につかまってじっと待ち伏せし、気づかず近寄ってきた小魚などを捕らえます。すかさず針を突き刺して消化液を相手に注ぎ、溶けた肉質を吸収する獰猛な昆虫です。その攻撃的な捕食シーンは飼育時にも容易に観察できることから、昔から子どもたちの人気者です。そんな迫力ある生態からは想像できないかもしれませんが、意外なことに、なんとセミヤカメムシの仲間なのです。

水中の『牛』と呼ぶ地域も 獰猛ながらもセミヤカメムシの仲間



水中に潜むタイコウチ(上)とミスカマキリ(下)

先述したタガメは、ここ広島県はもちろん、全国的に絶滅の危機にある非常に希少な生きものになってしまいました。が、タイコウチやミスカマキリはまだまだあちこちの田んぼで観ることが出来ます。しかし、それでも以前のように、どこかの田んぼに行っても簡単に捕まえることが出来るほどではなくなってしまいました。いつまでも昆虫少年たちの遊び仲間であるこの小さな虫をこれからもずっと見守っていきたく思います。
(環境保全課 原 竜也)

ハヤブサは、全国に生息するカラスくらいの大きさの猛禽類です。海岸や山の崖地の岩棚に産卵して子育てをします。見晴らしのよい高い場所にとまり、ヒヨドリなどの鳥をみつけると、獲物めがけて急降下して捕えます。そのスピードは時速300kmといわれ、新幹線の最高速度に匹敵します。狩りの躍動感と精悍な姿から、寝台特急やバイクなどさまざまなものに「ハヤブサ」の名前がつけられています。

いきものをまもる

15 ハヤブサ

サが住んでいることが話題になったことをご存知でしょうか。最近では、高層ビルや工場の煙突で繁殖するハヤブサが、各地でみられるようになったのです。ハヤブサにとってビルや煙突は、自然の崖と同じように見えるのかもしれませんが、

さらに、市街地に多く生息するドバトなどが繁殖に必要な餌条件を満たしてくれます。今では、都会生まれ都会育ちのハヤブサも珍しくないようです。

近年は個体数が回復 都会生まれ都会育ちの個体も

ハヤブサは1950-70年代に世界規模で激減しましたが、近年は個体数が回復しているようです。個体数が減少した原因は、有機塩素系の農薬に汚染された鳥を食べて、体内に高濃度の農薬が蓄積したためであったと、欧米の調査でわかりました。農薬が蓄積すると卵の殻が薄くなり、親鳥が温めている間に卵が割れて雛を孵せないのです。日本でもかつて減少傾向がみられたため、環境省の絶滅のおそれのある野生生物に挙げられています。数年前、広島市の中心街のホテルにハヤブ



力強くはばたくハヤブサ

都市にみられる生態系には、外来種が多く構成種が少ない特徴があります。また、緑の多い公園は、渡りの小鳥が休憩地に利用するなど、人工的な環境の中に自然が混在した状態がみられます。ハヤブサは、自然とはいえこの生態系の構成員として生息し始めました。ハヤブサのような希少種を都市の生態系の中にどう位置づけ、都市の「自然」とどう関わっていくかが新たな課題といえるかもしれません。
(環境保全課 松本 明子)

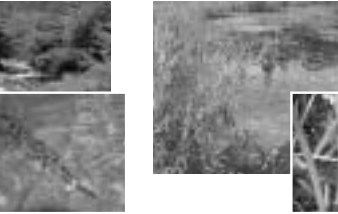
生物調査事業

さまざまな人間活動や生活様式の変化により、近年地域の生物が減っています。豊かな自然は私たちの暮らしにとってなくてはならないものです。当協会では、身近な自然を知り、大切な生き物を守るための生物調査事業を行っています。

地域の自然を知る
陸上生物・水生生物・海域生物調査



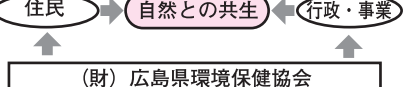
大切な生き物を守る
野生動植物保全対策調査



失われた自然を取り戻す
自然再生計画立案・実施



実施の枠組み
住民や行政・事業者の自然との共生の取組を生物保全の専門家としてお手伝いします。



問い合わせ：
財団法人広島県環境保健協会
企画開発センター 環境保全課
電話：082-293-1580 (受付時) FAX：082-293-8915